

## 図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義との関係について

池 田 証 寿

### 一 はじめに

図書寮本類聚名義抄では熟字項が多く単字項が少ないという特徴がある。一方、観智院本類聚名義抄では単字項がその大半を占め熟字項の割合が少ない。掲出項の形態の違いは、図書寮本と観智院本との大きな相違点の一つとなっている（宮内庁書陵部一九五一、吉田金彦一九五六等）。

図書寮本名義抄の熟字項には仏典の音義・注疏類に依拠したと見られる例が多く、その編纂の目的が仏典の解説のためであったことをうかがわせる（吉田金彦一九五五、貞苺伊徳一九八九）。しかし、図書寮本名義抄に熟字項が多いとはいっても、同一の単字を含む熟字項は連続して掲出されるのが原則であり、当該の項もしくは前後の項に単字の注文（音注・義注・字体注・経文校異・和訓）が全く見えない熟字項は皆無と違って差し支えない。体裁の上から図書寮本名義抄を単字字書とすることは勿論できないが、内容の上から図書寮本名義抄を単字字書として評価することはできる。図書寮本名義抄編纂の主たる目的が仏典解説のためであったとしても、単字字書としての利用も考慮に入れていたと考えることは許されるであろう。そこで本稿では、図書寮本名義抄の単字字書としての性格を、単字の採録範囲・字順等の点について検討してみようと思う。検討

の方法は、図書寮本名義抄と篆隸万象名義とを相互に比較対照することによって行うことにする。篆隸万象名義と比較するのは、これが玉篇（梁・顧野王撰）を節略した単字字書であり、図書寮本名義抄の主要な出典の一つになっているからである。

### 二 従来の研究

図書寮本名義抄における篆隸万象名義の引例数は約五二〇であり、この数は図書寮本名義抄の数多くの出典中、玄応音義・玉篇に次いで第三位に位置する。引例数の多さは、篆隸万象名義が図書寮本名義抄の根幹資料の一つであったことを物語る。

図書寮本名義抄は弘法大師撰篆隸万象名義を「弘」として引用する（宮内庁書陵部一九五一）。「弘」として引かれる注文には金剛頂經一字頂輪王儀軌音義によるものがわずかに含まれるが、ほとんどは篆隸万象名義によるものである（吉田金彦一九五四）。図書寮本名義抄における篆隸万象名義の引用方法について卓見を示したのは宮澤俊雅（一九七三）である。この論では、図書寮本名義抄撰者は篆隸万象名義の前半一〜四帖を「弘」として引用し、後半五・六帖を「玉」として引用したとする。これは前半を弘法大師の原撰と認めて尊重したが、後半は単なる抄録本と認めたからであるという。また近年、宮澤俊雅は、出典の序列に関する一連の論考（宮澤俊雅

一九七七、一九八六、一九八七、一九八八)を發表している。その内容を要約すれば次のようになる。

圖書寮本名義抄で引用頻度の多い主要な八出典(玄応撰一切経音義・玉篇・篆隸万象名義・真興撰大般若経音訓・源順撰倭名類聚抄・東宮切韻・中算撰妙法蓮華経积文・慈恩撰書)のうち、その原典が現存するのは、玄応音義・玉篇(部分存)・篆隸万象名義・和名抄・法華积文・慈恩撰法華音訓の六つである。このうち原典が完存する四出典(法華积文・和名抄・篆隸万象名義・慈恩撰法華音訓)を取り上げて、圖書寮本名義抄への受容を検討している。各出典について受容の仕方を検討する方法は、圖書寮本名義抄の現存する一七の部首に対応する各出典の条項を抜き出して圖書寮本名義抄へ採録されているか、また同内容の音注・积義が各出典にある場合に出典の採録の序列はどうか、を検討するというものである。結論として主要八出典の採録序列は、慈恩撰書・玄応音義・篆隸万象名義・法華积文・大般若経音訓・玉篇・東宮切韻・和名抄(一部推定)の順になるとした。そして、圖書寮本名義抄の撰者は、この序列に従って、各出典から音注・积義を採録していると論じたのである。

宮澤俊雅の出典の採録序列に関する研究は、「諸書引用の順序に或る程度の法則性があるのではないか」(築島裕一九五九)、あるいは「八等価の関係にある音注を併記しない」という方針がたらぬかれている(小松英雄一九七二)といった従来の指摘を正面から論じ、大きく発展させたものであり、その精確な調査に裏付けされた結論は強い説得力を有する。また、圖書寮本名義抄の出典を論じるには、当該の出典からの引用本文の分析だけでは不十分であり、引

用されなかった部分への配慮が不可欠である、という研究方法上の問題も提起している。

圖書寮本名義抄の出典の採録序列に関する研究は、宮澤自身によってさらに追究されているし、他の論者による研究も相次いでいる。宮澤俊雅(一九九二)は、注文が字体注・正音注・義注(又音等を含む)・真仮名和訓・呉音注・訓点本等による片仮名和訓・玉抄等による片仮名和訓・和音注のように一定の順序で配列され、正音注・義注・片仮名和訓には出典による配列の序列があることを論証している。他の論者によるものでは、山本秀人(一九九〇)が、真興撰大般若経音訓の引用法を、叡山文庫蔵息心抄所引の逸文との比較により調査し、大般若経音訓の採録序列が慈恩撰書・玄応音義・法華积文よりも下位であることを確認している。さらに山本秀人(一九九二)では、圖書寮本名義抄の標出語がどのような出典に基づくものであるかを、慈恩撰書・玄応音義・法華积文・大般若経音訓および明慈撰書を引用する標出語の分析から論じ、音注・积義の採録に認められた採録の序列は標出語の採録についても認められることを明らかにしている。一方、池田証寿(一九九一)は、宮澤論文の方法を玄応音義に適用したものであるが、篆隸万象名義との採録序列が引例数の多寡により決定できないこと等から、掲出項は篆隸万象名義より玄応音義を優先して採録、音注・积義は玄応音義より篆隸万象名義を優先して採録する方針であったことを述べている。なお、望月郁子(一九八五)は、類聚名義抄の圖書寮本・観智院本相互の間で篆隸万象名義の扱い方に相違があるかどうかを確かめるといふ観点から圖書寮本名義抄と篆隸万象名義との関係を調査し、慈恩・玄応の説を弘法の説より重視しているとする。これは慈恩撰書・玄応音義と篆隸万象名義とを相互に対照した上での立論ではない

が、慈恩の説を弘法の説より優先したとする点は首肯できる。

このような図書寮本名義抄の出典研究の現状をみると、篆隸万象名義との関係については論じつくされた感も抱かれるのであるが、なお残された問題があるようにも思われる。宮澤論文によって解明された出典の採録序列は大半の掲出項について当てはまるのであるが、例外がある。例外は篆隸万象名義と玄応音義との間に認められる。篆隸万象名義と玄応音義との採録序列は単純に決定し難く、これは篆隸万象名義を参照しない場合があったためと考えざるを得ない(池田証寿一九九一)。もし篆隸万象名義を参照しない場合が認められるとするならば、どうしてそれが生じたのか、また篆隸万象名義を参照・引用する項とこれを参照・引用しない項との間にどのような違いがあるのかが問題になる。この問題を念頭に置いた上で、図書寮本名義抄における単字の採録範囲と字順とを検討する必要がある。そこで次に、図書寮本名義抄における篆隸万象名義前半の採録状況を概観し、篆隸万象名義を参照していない掲出項の存在を確認したいと思う。なおその際に、慈恩撰書・篆隸万象名義・法華釈文・和名抄はその反切・釈義の採録序列が確定したものとし、玄応音義は未確定として論を進めて行くことにする。

### 三 篆隸万象名義前半の採録状況

図書寮本名義抄の全掲出項を対象として、篆隸万象名義前半(一四帖)に対応する掲出字があるかどうか、またその注文を採録しているかどうかを調査し、次の三つに分類した(表1参照)。

弘あり―篆隸万象名義前半を「弘」として採録

特 時止反頼也怙也負也自也(篆隸万象名義II 83ウ4)

特怙 上・弘云時止反頼也怙也負也自也・中云倚也憑記也・真

云―依倚也タノム易・下…(図書寮本名義抄二四〇6、声点等略)

弘なし―篆隸万象名義前半に掲出字があるにも拘らず、その注文

を引かない

惇 渠季反心動也(篆II 87オ2)

惇惇 無垢稱疏云―者怙怖也 广云古痿其季反心動也氣不定也

(図二七一3)

誕 達恒反斯也大也信也慢也調也節也闇也(篆III 15オ6)

虚誕 達垣反誕欺也亦大也不実也謾音莫諫反(原作也)(玄応

音義卷一三(大治本)

誕育 音但類云正也大也谷又音延誤也・广云大也不実也謾八莫

諫√也欺也・公云音但不実也イツハリ異 真云―(図九

四4)

篆になし―篆隸万象名義に見えないが所属部首としては篆隸万象

名義前半に対応

詐(図七八6) 讎(八二三) 誌(八三4)等

表1により、図書寮本類聚名義抄の総単字(異なり)のうち、篆隸万象名義に掲出の単字は約八割を占めること、篆隸万象名義の注文の引用(「弘あり」)は約五割強であることがわかる。篆隸万象名義に掲出の単字で図書寮本類聚名義抄にその注文が引用されない例(「弘なし」)は三割近くあり、篆隸万象名義にない単字(「篆になし」)は約二割あることも判明する。ちなみに、水部をはじめ例数が極端に少ない部はその所属の漢字の大半が篆隸万象名義後半(五六帖)に対応するためである。

篆隸万象名義の引用がないのはどのような場合であろうか。「弘

表1 圖書寮本類聚名義抄における  
篆隸万象名義前半の採録状況

	弘あり	弘なし	篆になし	計
水	0	6	1	7
言	0	1	0	1
足	136	46	23	205
立	51	49	34	134
豆	14	1	2	17
卜	1	0	1	2
山	7	4	0	11
石	0	1	0	1
玉	0	0	0	0
邑	54	28	15	97
阜	29	12	5	46
土	1	0	0	1
心	80	21	40	141
巾	137	73	57	267
糸	1	3	0	4
衣	1	1	0	2
	1	0	0	1
計	513	246	178	937
%	54.75	26.25	19.00	100.00

(注) 重出字、参照注のみの例、篆隸万象名義目録部分を除く。

表2 類音注を採録する例

出典	弘あり	弘なし	計
ナシ	99	28	127
順	24	14	38
類	16	9	25
季	15	9	24
宋法花	9	2	11
応	7	2	9
留志	4	5	9
巽音決	3	4	7
宋東	7	1	8
親仏經	3	0	3
公	2	1	3
注蒙求	1	2	3
倭名後人加部	0	2	2
或反古	1	0	1
源為憲口遊	1	0	1
初学記	1	0	1
文集或音義	1	0	1
廣韵	1	0	1
慈	0	1	1
中	0	1	1
干	0	1	1
懋	0	1	1
計	195	87	282

なし」の一部は採録序列の点から説明できるし、篆隸万象名義の採録漏れも若干あるものと予想される。今、篆隸万象名義を参照したことが確実な例(「弘あり」と参照したかどうか不明の例(「弘なし」と分けて、篆隸万象名義の採録状況をまとめれば表2-6のようになる。

まず、篆隸万象名義を参照したことが確実な例(「弘あり」)について、類音注・反切・釈義の順にその採録状況を見ることにしよう。類音注の場合(表2の「弘あり」)・・・圖書寮本名状義抄では反切よりも類音注を優先して採録しており(小松英雄一九七一、宮澤俊雅一九七七外)、表2の結果はこれを示す。他書に類音注があれば、篆隸万象名義の反切は採録されないのである。

反切の場合(表3と表4の「弘あり」)・・・採録の序列が篆隸万象

名義よりも上位である慈恩撰書を採る例が一五条である。篆隸万象名義の採録漏れは、表4の慈恩撰書・篆隸万象名義以外の反切を採る七条と表4の反切を全く採らない二条、都合九条となる。

釈義の場合(表5と表6の「弘あり」)・・・採録の序列が篆隸万象名義よりも上位である慈恩撰書を採る例が二九条である。篆隸万象名義の採録漏れは、表5の慈恩撰書・篆隸万象名義以外の釈義を採る三条と表6の釈義を全く採らない一九条、都合二二条となる。

次に、篆隸万象名義を参照したかどうか不明の例(「弘なし」)について見よう。

類音注の場合(表2の「弘なし」)・・・篆隸万象名義の反切を採らず他の出典の類音注を採る例は八七条であるが、このうち次の例等二二条は篆隸万象名義に反切しかない。

表3 反切を採録する例

出典	弘あり	弘なし	計
弘	292	0	292
慈	15	10	25
応	3	96	99
ナ <sub>シ</sub>	0	7	7
中	2	3	5
玉	2	1	3
干	0	2	2
真	0	2	2
東	0	1	1
信	0	1	1
類	0	1	1
留 <sub>志</sub>	0	1	1
廣	0	1	1
懲	0	1	1
計	314	127	441

表4 反切を全く採録しない例

出典	弘あり	弘なし	計
弘	2	20	22

(注) 梵語音訳字の掲出項も含む。同音の反切と類音注がある場合は類音注で算定。「又去」のように声調の注記にする二条、虫損不明の一条を除く。

表5 積義を採録する例

出典	弘あり	弘なし	計
弘	1248	0	1248
慈	29	30	59
応	1	82	83
玉	0	8	8
東	0	4	4
ナ <sub>シ</sub>	0	4	4
中	0	4	4
真	1	2	3
順	0	2	2
懲	0	2	2
然	1	0	1
煦	0	1	1
類	0	1	1
季	0	1	1
廣	0	1	1
倭名後人加部	0	1	1
計	1280	143	1423

表6 積義を全く採録しない例

出典	弘あり	弘なし	計
弘	19	277	296

(注) 梵語音訳字の掲出項も含む。虫損不明の三条を除く。弘として引くも万象名義になき六条も除く。

これらは、反切よりも類音注を優先するという方針によって篆隸

詞	似茲反 (I 49ウ2)	音辞 (七四5)
郁	於陸反 (I 42オ2)	音煥 (一八〇1)
堵	都廬反 (I 30オ2)	音靚 (二一七5)
琴	渠林反 (I 29オ3)	音禽 (一六九7)
玲	力経反 (I 28ウ3)	類云零音 (一六一5)
琅	力當反 (I 28オ5)	順云郎干 (一六六5)
璵	於耕反 (I 27オ4)	類云嬰音 (一六五3)
瑤	餘招反 (I 27オ1)	順云昆遙 (一六四4)
瑩	為明反 (I 25ウ3)	公云：正榮 (一六四4)
玉	魚録反 (I 21ウ4)	音獄 (一五八1)

以上を整理すると、表7と表8のようになる。

万象名義が全く採録されなかったと考えられる。  
 反切の場合(表3と表4の「弘なし」)：採録の序列上位の慈恩撰書を採る例が一〇条、序列が単純に決定し難い玄応音義を採る例が九六条である。玄応音義の例はひとまず置くと、篆隸万象名義の採録漏れは、表3の慈恩撰書・玄応音義以外の出典を採る二一条と表4の反切を全く採らない二〇条、計四一条である。  
 積義の場合(表5と表6の「弘なし」)：採録の序列上位の慈恩撰書を採る例が三〇条、序列が単純に決定し難い玄応音義を採る例が八二条である。これもまた玄応音義の例を除くと、篆隸万象名義の採録漏れは、表5の慈恩撰書・玄応音義以外の積義を採る三一条と表6の積義を全く採らない二七七条、計三〇八条である。

表7 反 切

	弘あり	弘なし	計
(a) 慈恩撰書か万象名義を採る	307	10	317
(b) 玄応音義を採る	3	96	99
(c) (a)(b)以外	7	41	48
(d) 計	316	147	463
採録漏れの比率(c)/(d)	2.2%	27.9%	10.3%

表8 積 義

	弘あり	弘なし	計
(a) 慈恩撰書か万象名義を採る	1277	30	1307
(b) 玄応音義を採る	1	82	83
(c) (a)(b)以外	21	308	329
(d) 計	1299	420	1719
採録漏れの比率(c)/(d)	1.6%	73.3%	19.1%

ここでは、慈恩撰書・篆隸万象名義・玄応音義以外の反切・積義を採る例と、篆隸万象名義の反切・積義を全く採らない例を採録漏れとし、その比率を出してある。「採録漏れ」とは篆隸万象名義を参照したけれど採録しなかったという意味である。「弘あり」での篆隸万象名義の採録漏れは反切・積義とも約二%であり、文字通り採録漏れと認めて問題ない。一方、「弘なし」での篆隸万象名義の採録漏れは反切で二八%、積義で七三%である。これを採録漏れと

認めることは難しいのではないだろうか。

すでに述べたように採録序列の点から篆隸万象名義を全く引かなかったことを説明できるのは、採録序列が篆隸万象名義より上位の慈恩撰書を引く反切一〇条、積義三〇条である。これは次の例等、一八項に認められ、「弘あり」に準じてよいが、例は決して多くない。

註 之喩反疏也識也解也(篆Ⅲ18ウ4)

註記 上竹句反之喩反廣雅注疏也識也字林注解也通俗文記物曰

註切韻作注陟住之成一反(法華音訓四一左)

註記 音住・茲云疏也識也解也記□□切韻作注入中云丁住反

一猶記也又之成反非此旨√注同・下…(図七八七)

(△√内は割注)

問訊 思吝(原作各)反問也訊也辭也(篆Ⅲ9ウ4)

問訊 息音反玉篇訊問也辭言也執問通問曰訊(法華音訓五六

右)

問訊 茲云息音反問也辭也言也執問通問曰(図八九4)

ひとまず別扱いにした玄応音義は問題がある。これは、同じ内容の反切・積義が篆隸万象名義と玄応音義との双方に見える場合を取り上げて、次の三つに分けるとよい(詳細は池田証寿一九九一を参照)。

① 万象名義と玄応を引く項…………… 万象名義を引き

玄応音義を引かない

② 玄応を引かず万象名義を引く項…………… 万象名義を引き

玄応音義を引かない

③ 万象名義を引かず玄応を引く項…………… 玄応音義を引き

万象名義を引かない

①②が「弘あり」、③が「弘なし」である。篆隸万象名義と玄応音義の両方を参照したのが確実な例(①)では明らかに篆隸万象名義が玄応音義よりも優先して採録されている。反切・釈義の採録序列は玄応音義よりも篆隸万象名義が上位であり、③の篆隸万象名義を引かず玄応音義を引く項は篆隸万象名義を参照していないと考えざるを得ないのである。「弘なし」(③)は、反切九六条、釈義八二条、掲出項にして一〇〇項近くあり、単なる採録漏れとして済ますことはできない。

篆隸万象名義を参照したかどうか不明の例(「弘なし」)では、玄応音義の反切・釈義を引く全例と、慈恩撰書・玄応音義以外の出典の反切・釈義を引く大半の例とが篆隸万象名義を参照していないと考えられるのである。

#### 四 単字の採録範囲

図書寮本名義抄において篆隸万象名義を参照しない場合が認められるとすれば、篆隸万象名義に掲出の単字から注文を採録するかどうかの規準はどのようになっているのであろうか。この問題に関しては、宮澤俊雅(一九八七)の次の指摘が参考になる。

名義抄の撰者は、篆隸万象名義の内容を全載する方針ではなく、その掲出項の四割程度を実際の採録の対象としている。その際の、各掲出項を採録するか否かの規準は未だ明瞭ではないが、やはりその掲出字の常用性が一応の規準とはなっているらしく、さほど使用されない字は採録されていないようである。

まずこの指摘を確認してみよう。篆隸万象名義前半が図書寮本名義抄にどれだけ採録されているかを調べるわけだが、現段階で篆隸

表9 単字の採録範囲

	弘あり	弘なし	図になし	合計
玉	50	25	128	203
土	79	20	143	242
邑	30	11	174	215
足	51	48	99	198
心	137	71	214	422
言	136	45	188	369
計	483	220	946	1649
%	29.3	13.3	57.4	100.0

万象名義前半の全体と図書寮本名義抄の全体とを比較することはできていない。そこで篆隸万象名義前半から、図書寮本名義抄に対応し、比較的用例数の多い六部首(玉土邑足心言)を検討対象とする。両者の対応を次の三つに分類した(表9参照)。

- 弘あり | 図書寮本に掲出字があり注文を「弘」として採録
- 弘なし | 図書寮本に掲出字はあるが「弘」の注文の採録はない
- 図になし | 図書寮本に掲出字がない

表9により、篆隸万象名義の掲出字は図書寮本類聚名義抄に四割強採録されることがわかり、宮澤俊雅(一九八七)の指摘が確認される。しかし「弘なし」とした一割強は、前節に述べたように、篆隸万象名義を参照していないことが十分にあり得るのである。「弘

なし」の二二〇項のうち、図書寮本名義抄で篆隸万象名義を参照したのが確実なのは、採録序列が上位の慈恩撰書を引く一八項である。さらに篆隸万象名義で反切のみで図書寮本名義抄で類音注を引く例が二二項ある。そして実際に採録漏れした例を仮に一〇項から二〇項と見積っておこう。これら篆隸万象名義を参照したか、その疑いがある例を除くと、「弘なし」は一六〇〜一七〇項程度となる。この

数値は篆隸万象名義の掲出字の一割である。

要するに、図書寮本名義抄撰者は篆隸万象名義の掲出字の四割を採録しているが、その四割のうち篆隸万象名義を実際に参照・引用したのは三割、残り一割は篆隸万象名義を参考に参照しなかったと考えられるのである。

篆隸万象名義を実際に引用する規準はどうなっているのであろうか。宮澤俊雅（一九八七）の指摘を参考に常用性という観点から考えてみよう。

漢字の常用性という時、一般には使用頻度の高い漢字を指すことが多いと思われる（例：「常用漢字表」）。これを狭義の常用字と呼ぼう。字数としては二千字程度である（「常用漢字表」は一九四五字であるし、各種の調査でも使用頻度上位二千字で、総字数の九九％を占める。各種の調査の紹介は例えば田嶋一夫一九八九を参照）。一方、使用頻度に関わりなく各種文献にしばしば用いられる漢字もあり、これは広い意味で常用性のある漢字―広義の常用字―ということができる。例としてはJIS漢字が挙げられる。第一水準二九六五字、第二水準三三九〇字、計六三五五字である（補助漢字五八〇一字を含めれば、計一一一五六字だが、これにはかなり難しい字が入っている）。詳しくはJIS規格票「JIS X0208-1990 情報交換用漢字符号」を参照されたい。

さて、篆隸万象名義の掲出単字数は約一万六千字である。この四割程度が図書寮本名義抄に採録されたとすれば、図書寮本名義抄全体では六千〜七千の単字が採録範囲であったと考えられる（宮澤俊雅一九八七）。狭義の常用字は約二千字であり、これは図書寮本名義抄の単字の採録範囲にほとんど入ってしまう。このレベルの単字は当然採録されていたと予想される。問題は広義の常用字をどの程

度採録するかであったであろう。広義の常用字をJIS漢字の第一水準と第二水準にとれば、約六千字であり、図書寮本名義抄の単字の採録字数（推定）に近い。平安時代およびその前後の時代の文献における漢字使用の調査はいくつかあるが、ここにいう広義の常用字を論じる段階には至っていないと思われる。広義の常用字のデー

表10 JIS漢字の比率

	弘 あり	弘 なし	図になし	計
第一水準	186 (39%)	26 (12%)	12 (1%)	224 (14%)
第二水準	174 (36%)	53 (24%)	40 (4%)	267 (16%)
補助漢字	93 (19%)	94 (43%)	261 (28%)	448 (27%)
非JIS漢字	30 (6%)	47 (21%)	633 (67%)	710 (43%)
合計	483 (100%)	220 (100%)	946 (100%)	1,649 (100%)

タが整っていないこと、豊島正之・金水敏・古田啓の共同制作によるコンピュータ用の漢字字書 (JIS) が公表されていること等の理由から、少々荒っぽいだが、JIS漢字（第一水準・第二水準・補助漢字）にあるかどうかを目安として、常用性を検証してみることにした。例によって、篆隸万象名義前半の所属部首から名義抄に対応し比較的用例数の多い六部首（玉土邑足心言）を取り上げる（表10参照）。

表10によると、JIS漢字の比率は、「弘あり」「弘なし」と「図になし」との間に歴然とした差があるし、「弘あり」と「弘なし」とにも有意差が認められる。第一水準・第二水準をとってJIS漢字の比率を見ると「弘あり」は七五％、「弘なし」は三六％、「図になし」は五％となる。補助漢字まで含めても同様の傾向である。もっとも、JIS漢字に「歴史的文献を扱うもの



では字種の不足が著しく(石塚晴通一九九一)、JISにある漢字が図書寮本名義抄編纂当時の常用字であったという保証はない。ただ少なくとも篆隸万象名義を引く例(「弘あり」)に常用字が多く、篆隸万象名義を参照したかどうか不明の例(「弘なし」)に常用字が少なく、図書寮本名義抄に採録のない掲出字の例(「図になし」)に常用字がかなり少ない、という印象は裏付けられるといっても許されよう。

ちなみに図書寮本名義抄に採録のない掲出字(「図になし」)のうちJIS漢字の第一水準・第二水準にあるのは次の五二字である。

- 珪 在 塾 証 誼 垂 訂 膳 塙 封 慕 惑(第一水準)
- 址 埒 塙 埜 毀 塙 忝 應 恂 怍 恇 恇 恇 恇
- 愴 愴 愴 愴 愴 愴 愴 愴 愴 愴 愴 愴 愴 愴 愴 愴
- 諤 諤 諤 諤 諤 諤 諤 諤 諤 諤 諤 諤 諤 諤 諤 諤

当然採録されてよさそうな字も見えるが、それらの一部はしかるべき不採録の理由があったと考えられる。例えば、「封」は篆隸万象名義土部にあるが図書寮本名義抄土部になく例である。しかし、これは観智院本名義抄寸部に掲出されている。「封」は図書寮本名義抄に見えないのは、現存の図書寮本名義抄に欠ける寸部で採録されたためと考えられる(類例: 在・垂・膳・慕・惑・毀・忝・恂・愴・諤)。残りは、取り敢えず採録漏れか常用字でなかったと見ておく。

ところで、篆隸万象名義を引く掲出字とこれを引かない掲出字とを較べてみると、篆隸万象名義を引く掲出字には、複数出典を採ることが多く、篆隸万象名義を引かない掲出字には、複数出典を採ることが少ないという傾向が認められる。例えば言部では次のようになっている(「弘なし」は篆隸万象名義を引かない例であるが、掲出項が複数ある場合は詳細な注文のあるものを取り、熟字項は単字

に分けて算定した)。

項数	弘あり	弘なし
出典数	五五一	九三
項目あたりの平均出典数は、篆隸万象名義を引く例が四出典(551/136=4.05)、篆隸万象名義を引かない例が二出典(93/46=2.02)である。複数出典を引くことは、各種の出典に頻出することを示すと考えてよいであろう。言部に限るという条件が付くが、篆隸万象名義を引く例の出典は、	一三六	五三
弘	五三	五三
出典無表記	五三	五三
真	五三	五三
応	四九	四九
東	二二	二二
中	二一	二一
詩	二〇	二〇
慈	一五	一五
玉	一五	一五
記	一四	一四
(以下略)		
等約六〇種を数える。各種の出典に頻出することは、まさにその字の常用性を示すと判断される。これに対し、篆隸万象名義を引かない例の出典は	三二	三二
応	一一	一一
出典無表記	一一	一一
真	六	六

慈	五
東	五
公	四
詩	四
類	三
季	三

(以下略)

等二〇種ほどである。序列上位の慈恩撰書を引く掲出字は篆隸万象名義を引く掲出字に準じて扱う必要があるが、およその傾向として、篆隸万象名義を引かない掲出字は、図書寮本名義抄の撰者が出典とした文献に出現することが少ないといつてよい。出現頻度の低さが常用字の少なさに現れていると判断される。

なお、篆隸万象名義を引かない例の出典では玄応音義の例が目立つ。この点は以下のように考えられる。図書寮本名義抄の掲出字は仏典音義・注疏類に依拠する例が多い。法華音訓・法華玄贊・法華釈文は、池田証寿・小助川貞次・浅田雅志・宮澤俊雅(一九八八)を参照すればこの点を容易に確認できる。玄応音義は原卓志・山本秀人(一九八三)や池田証寿(一九九一・一九九二)により明らかであるし、逸書である大般若経音訓は山本秀人(一九九〇)にこの点をうかがうことができる。また、法華音訓・法華釈文の掲出字はほぼ全載されているし(宮澤俊雅一九七七、一九八八)、玄応音義も同様である(池田証寿一九九一)。大般若経音訓は逸書であるが、おそらく全載の方針であろう(山本秀人一九九〇)。また和名抄も全載の方針と見てよいだろう(宮澤俊雅一九八六)。図書寮本名義抄での引例数は玄応音義が最も多く約一三〇〇を占め、以下、玉篇約六〇〇、篆隸万象名義約五二〇、大般若経音訓約四五〇、和名抄約

四五〇、東宮切韻約四二〇、法華釈文約三六〇、慈恩撰書約三三〇と続く。図書寮本名義抄の撰者は右に挙げた仏典音義・注疏類や和名抄をいわば掲出字の台帳とし、これに篆隸万象名義・玉篇・東宮切韻等の字書・韻書およびその他の出典を参照しながら、各出典について繰り返し集字していったのである。こうした作業を行う過程で、玄応音義は分量が多いために取りこぼしが多くなったと思われる。玄応音義からの取りこぼしを補った際に、それらの掲出字が常用字でないことや他の出典に見えないことがあり、篆隸万象名義を参照しなかったものと考えられる。

すでにしばしば指摘されていることであるが、篆隸万象名義が類聚名義抄の根幹資料であることは、その書名に「名義」が共通することや引例数の多さからして疑いがないと思う。図書寮本名義抄における篆隸万象名義の利用法は、図書寮本名義抄の各出典に類出する単字についてその字体や注文内容の適否を判断することにあつたであろう。篆隸万象名義は、掲出字の同定のために最も証拠となる文献であつたと考えられる。他方、篆隸万象名義を引かない掲出字は、常用字でなく、複数出典に出現することも少ないため、差し当たり篆隸万象名義を引用しないでおいたと説明されよう。

## 五 単字の字順

図書寮本名義抄の字順(掲出字の配列)に篆隸万象名義がならんかの関わりがあることは宮澤俊雅(一九八七)に予想されている。ただしその根拠を明言しないが、宮澤俊雅(一九七三)の付表1(篆隸万象名義と図書寮本類聚名義抄所見「弘」との対照表)によつて図書寮本名義抄中に篆隸万象名義の字順に従う部分があること

は容易に察知できるから、そのような部分を踏まえての発言と思われる。以下、この点を追究してみよう。

図書寮本名義抄において同一の単字を含む熟字は連続して掲出されるとみなせる。連続する単字は、慈恩撰書・篆隸万象名義を引く例を比較の対象とし、この二出典からの引用がない例は詳細な注文のある例を対象とする。連続せず間隔を置いて重出する単字は若干問題がある。その一部には掲出字の左下あたりに「又」を小書きしてその旨を明らかにしているが、網羅しているわけでもなさそうである。字順の傾向を観察するのが目的であるから、重出字は、篆隸万象名義を引く例・前出の例・注文がより詳細な例を優先して比較の対象とすることにす。

取り上げるのは、篆隸万象名義前半に対応する図書寮本類聚名義抄の六部(言足玉邑土心)である。各部の字順は次のA〜E群に分けることができそうである。

- 群 篆隸万象名義引用の多寡
- A 篆隸万象名義を引くことが多い 仏教要語
- B 篆隸万象名義を引くことが多い 類似字形・異体字
- C 篆隸万象名義を引くことが多い 万象名義の出現順
- D 篆隸万象名義を引くことが多い 韻書と関係あるか
- E 篆隸万象名義を引くことが少ない 特定の出典がかたまることもある

各部について字順の概略を示す。ただし各群の境界は明瞭ではなく、多分に連続的である。

〈言部〉

- 言(七〇一) | 信(七三三) A
- 討(七三六) | 譬(九〇二) B

- 語(九〇三) | 譚(九三六) C
- 識(九四一) | 詆(九六二) E
- 讀(九六三) | 訝(二〇〇六) D
- 証(二〇〇七) | 諛(二〇一三) E

〈足部〉

- 足(二〇二一) | 踞(二〇六二) B
- 跟(二〇六五) | 踈(二二二六) C
- 躡(二二二六) | 蹠(二二七六) E
- 蹠(二二七六) | 躡(二二八四) C
- 跂(二二八四) | 蹠(二二八五) E

〈玉部〉

- 玉(二五八一) | 玩(二六〇四) A
- 瓊(二六〇六) | 璣(二六六二) C(弘の引用やや少ない)
- 玖(二六六三) | 琮(二六八二) E
- 王(二六八二) | 聖(二七〇七) C(弘の引用やや少ない)

〈邑部〉

- 邑(二七一) | 郁(二八〇一) A、後半はB(部都郁)
- 邦(二八〇四) | 郎(二八三六) C
- 郊(二八三七) | 鄜(二八五四) E

〈土部〉

- 土(二二三一) | 壘(二三一) C(ところどころ類似字形混ざる)

〈心部〉

- 心(二二二一) | 塩(二二二五) E
- 心(二二二六) | 思(二二三八) A(類似字形多し)
- 忠(二二三八) | 悝(二二四〇) C

- 恃(二四〇六) | 情(二四四一) B
- 恩(二四四二) | 悌(二五九一) C
- 憎(二五九三) | 惱(二六二六) E
- 恐(二六二六) | 愆(二六六六) C
- 愆(二六六七) | 忽(二七六一) E

A、D群は篆隸万象名義の引用が多い部分である。これらの群の特徴は次のようになる。

A群は、例えば「讀誦」「論議」「知識」「信受」(言部)のように、仏教要語を配するが、B群との区別がやや明瞭でない。心部のA群は「智慧」「慈悲」「有情」等仏教要語が多いと見たが、「心―慧―恵―慈―悲―愍―息―情―性―意―慎―思―忠」と続く字順はB群と見るべきかもしれない。また、仏教要語はA群以外にも見えるが、それは類似字形や篆隸万象名義の字順に従って配列されている。特に重要な語が部首冒頭に集められたのであろう。

B群は、類似字形・異体字を配するが、より前の方で類似字形が密である。例えば「討―訶―計―訶―訶―訶―詞―訶―訶―訶―訶―訶―訶」(言部)のように類似字形を連結して行くのである。言部はこの傾向が顕著である。B群以外でも類似字形を意識した部分はあちこちに認めることができる。

C群は、篆隸万象名義の字順に従って配する。言部を例にして、この様相を次に示す。篆隸万象名義の引用のない単字は図書寮本の所在を( )に入れる。掲出項は熟字項のみ示す。

- 単字 掲出項 図書寮本 万象名義
- 1語 九〇三 III 7ウ6
- 2談 九〇四 III 8オ2
- 3謂 九〇四 III 8オ2

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	
諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡	諡
諡比			迷諡	譏嫌	譏他	諡他	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔	諡詔
九三	九三	九三	九三	九三	九三	九三	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二	九二
五	五	四	三	三	二	一	七	五	四	四	三	二	一	七	七	六	六	五	五	三	三	一	一	六	五	五
III	III	III	III	III	なし	なし	III	III	III	III	III	III	III	III	III	III	なし	III	III	III	III	III	III	III	III	III
18	17	16	16	13			12	12	16	12	11	11	10	10	10	10	11	11	9	8	8	8	17	17	8	3
オ	ウ	オ	オ	ウ			ウ	オ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ

30 諫	九三六	III 18オ6	
31 譯 翻譯	九三六	III 18ウ1	
例外は熟字項(4諫と5詆、19諍と20訟)や、類似字形を考慮した箇所(6諍と7諍)に認められるようである。			
D群は、切韻系韻書との関係が予想される。言部のD群から明瞭な部分を抜き出すと以下のようなになる。ここでは前出する単字も参考として掲げる(図書寮本の所在に「」を付した例)。( )と「」は篆隸万象名義の引用が無い例である。			
単字 掲出項 図書寮本 万象名義 広韻 備考			
(略)			
1 訪 訪括	九八一	III 9オ5	去声漾韻
2 誼 之誼	九八一	III 11オ4	去声寘韻
3 𪔐 <sup>x</sup>	九八二	なし	上声彌韻
4 督 <sup>x</sup>	(九八二)	III 10オ3	入声黠韻
5 諱	(九八二)	III 18オ4	去声未韻
6 謝 愧謝	九八三	III 11ウ5	去声禡韻
7 詠	九八四	III 12オ1	去声映韻
8 詣	九八四	III 12オ4	去声霽韻
9 諤 紕謬	(九八四)	III 16オ4	去声幼韻
10 證 疾證	九八六	III 17ウ2	去声證韻
11 厝 誤人	九八六	III 22オ1	去声證韻
12 誤	九八七	III 14オ5	去声暮韻
13 詬	九九一	III 18オ5	上声厚韻
14 譜 <sup>x</sup>	九九一	III 22オ6	上声姥韻

図本「弘云居候反」と去声候韻を示す。

15 譽	(九九二)	III 11ウ2	平声魚韻
16 証 詔証	九九三	III 13ウ3	去声漾韻
17 謁	九九四	III 8オ4	入声月韻
18 藹 <sup>x</sup> 藹吉	(九九五)	III 10オ5	去声泰韻
19 諶 諶得	(九九五)	III 22ウ1	入声葉韻
20 訖 未訖	九九六	III 12オ1	入声迄韻
21 諶	九九六	III 11オ3	入声質韻
22 訣 辭訣	九九七	なし	入声屑韻

(以下略)

省略した前の部分には平声字が多く、後の部分には去声字が多いとも見得るが、さほど明瞭でない。言部D群は、重出字(前出字を含む)を除くと、四一字ほどであり、右に列挙したのはその半分である。1訪、16証は去声、17謁、22訣は入声がかたまっている。異例(単字の右肩にXを付す)は、いずれも類似字形が関わっていると思われる。18藹が17謁の類似字形であるのは明白であろう。14諶は13詬の類似字形であろうか。3𪔐と4督は類似字形であるのは確かだが、なぜここに置かれたか、不審である。憶測するに、3𪔐は上声全濁字(並母上声語韻)であるから、その去声化の現象が関与してここに置かれたのかもしれない(続く4督は3𪔐の類似字形)。しかし、図書寮本名義抄と韻書との関係については種々検討すべき点があるように思われるので、今回は字順から見た問題点を指摘するにとどめておきたい。

D群は、篆隸万象名義の引用が少ない部分であって、篆隸万象名義を参照しなかったと見られる。玄応音義等、特定の出典による掲

図本「宋云音預又平」とする。預字は去声御韻。

表11 A～E群での篆隸万象名義の採録

	A群	B群	C群	D群	E群	計
① 弘 あり	33	82	312	34	26	487
② 弘 なし	5	30	49	7	138	229
計	38	112	361	41	164	716
①/(①+②)	87%	73%	86%	83%	16%	68%

出字がかたまつて引かれることがある。これは図書寮本名義抄の撰者が出典とした文献から繰り返し集字していった際に、取りこぼした分であろう。

A～E群の例数と各群で篆隸万象名義がどの程度採録されているかを調べると表11のようになる。篆隸万象名義の引用の多寡によりA～E群に分けたので、当然のことながらA～D群で篆隸万象名義の引用が多く、E群で少なくなっている。B群で篆隸万象名義を引くことが若干少ない点がちよつと気になるが、これは類似字形を意識してE群から移されたかと想像される。それよりも注目したいのは、篆隸万象名義の字順に従うと見られるC群が全体の約五割を占める点である(361/716=0.504)。もっとも、C群とした部分には、おそらく類似

字形を意識して配列したり、熟字項として掲出したりしたために、篆隸万象名義の字順に従わない箇所もかなり生じている。この点を割引く必要があるが、篆隸万象名義の字順に従う部分がかんりの割合を占めることは確かだ、このことは篆隸万象名義が図書寮本名義抄の根幹資料であることを字順の面から証するものであろう。

わずか六部首(言足玉邑土心)の範囲なので、字順の傾向をいうのは慎重にしなければならないが、大雑把には、まず仏教要語・類似字形を優先して配し、その後に篆隸万象名義の順に配するという傾向かと思われる。篆隸万象名義の字順に従うC群でも類似字形を

意識して配列した箇所は随所にあり、類似字形による配列を重視していたことは認められるだろう。

図書寮本名義抄の掲出字は慈恩・玄応等の仏典音義・注疏類に依拠することが多いのであるが、例えば慈恩の法華音訓あるいは玄応音義の出現順による配列は、見出しにくいようである(池田証寿・小助川貞次・浅田雅志・宮澤俊雅一九八八、池田証寿一九九一―九二参照)。すでに述べたように、慈恩・玄応等の仏典音義・注疏類が掲出字を採録するかどうかについて深い関わりを持っていることは確かである。仏教要語が各部首のはじめの部分に集るという点も重要である。しかし、慈恩・玄応等の仏典音義・注疏類が掲出字の配列(字順)の全般に関与していたとみることは無理であろう。このことは図書寮本名義抄が単なる仏典音義の寄せ集めでないことを示している。

ちなみに、渡辺実(一九七一)は高山寺本名義抄を解説した箇所でも、各部の字順に法華経との関わりを想定している。現存の図書寮本名義抄について観察する限り、字順の全般に法華経が関与したとするのは難しいようである。しかし、各部の最初の部分に仏教要語を配することがあり、その部分に慈恩・中算等の音義・注疏類による法華経語彙が掲出されていることは確かに認められる。

篆隸万象名義の字順に従う部分が多いことは、掲出字の配列(字順)の全般に関して篆隸万象名義が最も重要な出典であったことを示す。ただ篆隸万象名義一辺倒でなく、類似字形を配列した部分があることは注意すべきである。この部分は、図書寮本名義抄の撰者の独創なのか、それともなんらかの先行文献があったのか、いまのところ不明であり、この点に検討の余地を残すが、いずれにしても図書寮本名義抄の撰者が類似字形の弁別に強い関心を持っていたこ

とを反映するものである。類似字形の弁別を主目的として使おうとした場合、篆隸万象名義はあまり役立たないと認識していたのであろう。

ところで、観智院本名義抄の部首の配列や部首内の字順に「類似字形排列」が認められることは酒井愷二(一九六七)によって明らかにされている。続いて貞苜伊徳(一九八三、一九八九)は、特に各部の中央より後に、玉篇と同じ字順の「玉篇字順群」が存在すること、それらは「一種の玉篇」によると見られることを説明した。この二つの研究は観智院本名義抄の構成を明らかにしたという点において、大きな意義を有する。同様の事象が図書寮本名義抄にも認められたことになるが、これはいま述べた二つの研究や宮澤俊雅(一九七七)の附表1(篆隸万象名義と図書寮本類聚名義抄所見「弘」との対照表)等によってある程度予想されるものであった。本稿はこの点を確認したものにはすぎない。ただ図書寮本名義抄と観智院本名義抄とを比較すると、類似字形配列が先行し玉篇字順群が後に続く点は共通するが、前者では玉篇字順群が多くを占めるのに対して後者では類似字形配列が主流をなすかと思われる。もしそうだとすれば、玉篇字順群を主体としつつ仏教要語を最優先し類似字形配列を加味した類聚名義抄が原形に近いものであり、これを土台として類似字形配列を推し進めて行った結果、玉篇字順群が崩れてしまったと推定することができるかもしれない。しかし、観智院本名義抄の参照文献については不明の点が多いので、今回はこのあたりにとどめておく。

## 六 おわりに

本稿では、篆隸万象名義との比較を通して、図書寮本名義抄の掲出字の採録範囲と字順とを検討し、その単字字書としての性格を考察した。結論は次の二点にまとめられる。

一、図書寮本名義抄の撰者は、篆隸万象名義を全載する方針ではなく常用字を採録している。篆隸万象名義を引く単字には常用字が多く、篆隸万象名義を引かない単字には常用字が少ない。

これは、図書寮本名義抄の撰者が出典とした文献に頻出する単字を掲出字とし、それらの単字について篆隸万象名義を引用して行ったためと考えられる。

二、図書寮本名義抄の各部(言足玉邑土心)の字順は、仏教要語・類似字形を優先して配し、その後篆隸万象名義の順に配するという傾向であり、わずかであるが声調によりまとめた部分も認められる。篆隸万象名義の順に配する部分は全体の半分を占めており、篆隸万象名義が図書寮本名義抄の根幹資料であったことを字順の面から示している。

### 使用テキスト

図書寮本名義抄Ⅱ『図書寮本類聚名義抄』(勉誠社)。篆隸万象名義Ⅱ『高山寺古辞書資料第一』(東京大学出版会)。玄応音義Ⅱ『高麗大藏経』(東国大学校)その他。法華音訓Ⅱ『高麗大藏経』(東国大学校)。

## 引用文献

- 池田証寿（一九九二）「圖書寮本類聚名義抄と玄応音義との関係について」『国語国文研究』第八号
- 池田証寿（一九九二）「圖書寮本類聚名義抄所引玄応音義対照表（上）（下）」『人文科学論集』第二五号、第二六号（信州大学人文学部）
- 石塚晴通（一九九一）「情報交換用漢字符号の問題点」〔国語学会発表要旨〕『国語学』第一六六集
- 宮内庁書陵部（一九五一）「圖書寮本類聚名義抄解説」〔宮内庁書陵部刊複製本付載〕
- 小松英雄（一九七二）『日本声調史論考』（風間書房）
- 酒井憲二（一九六七）「類聚名義抄の字順と部首排列」『本邦辞書史論叢』（三省堂）
- 貞苺伊徳（一九八三）「観智院本類聚名義抄の形成に関する考察その1 字順をめぐる問題」『第四八回訓点語学会口頭発表』
- 貞苺伊徳（一九八九）「日本の字典 その一」『漢字講座2—漢字研究の歩み』（明治書院）
- 田嶋一夫（一九八九）「コンピュータと漢字」『漢字講座11—漢字と国語問題』（明治書院）
- 築島 裕（一九五九）「訓読史上の圖書寮本類聚名義抄」『国語学第三七集（平安時代の漢文訓読語につきての研究）』一九六三 東京大学出版会 所収）
- 原卓志・山本秀人（一九八三）「圖書寮本類聚名義抄における玄応一切経音義引用の態度について」『鎌倉時代語研究』第六輯（武蔵野書院）
- 宮澤俊雅（一九七三）「圖書寮本類聚名義抄に見える篆隸万象名義について」『訓点語と訓点資料』第五二輯
- 宮澤俊雅（一九七七）「圖書寮本類聚名義抄と妙法蓮華経积文」『松村明教授還暦記念国語学と国語史』（明治書院）
- 宮澤俊雅（一九八六）「圖書寮本類聚名義抄と倭名類聚抄」『松村明教授古稀記念国語研究論集』（明治書院）
- 宮澤俊雅（一九八七）「圖書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義」『訓点語と訓点資料』第七輯
- 宮澤俊雅（一九八八）「圖書寮本類聚名義抄と法華音訓」『北大国語学講座二十周年記念論輯辞書・音義』（汲古書院）
- 宮澤俊雅（一九九二）「圖書寮本類聚名義抄の注文の配列について」『小林芳規博士退官記念国語学論集』（汲古書院）
- 池田証寿・小助川貞次・浅田雅志・宮澤俊雅（一九八八）「法華积文並類聚名義抄所引慈恩积对照表」『北大国語学講座二十周年記念論輯辞書・音義』（汲古書院）
- 望月郁子（一九八五）「圖書寮本『類聚名義抄』における『篆隸万象名義』の扱い方—改編本におけるそれとの対比のために—」『訓点語と訓点資料』第七五輯（『類聚名義抄の文献学的研究』一九九二 笠間書院 所収）



山本秀人（一九九〇）

「図書寮本類聚名義抄における真興大般若経音訓の引用法について―叡山文庫蔵息心抄所引の真興大般若経音訓との比較より―」訓点語と訓点資料第八五輯

山本秀人（一九九二）

「図書寮本類聚名義抄における標出語の採録法について―注文の出典との関連を視点に―」『小林芳規博士退官記念国語学論集』（汲古書院）

吉田金彦（一九五四）

「図書寮本類聚名義抄出典攷（中）」訓点語と訓点資料第三輯

吉田金彦（一九五五）

「類聚名義抄小論」国語国文第二四卷第三号

吉田金彦（一九五六）

「類聚名義抄の展開」訓点語と訓点資料第六輯

渡辺 実（一九七二）

「解題」『天理図書館善本叢書和書之部第二巻和名類聚抄三賢類字集』（八木書店）

〔付記〕本稿は「図書寮本類聚名義抄と篆隸万象名義との関係について」（訓点語学会研究発表会、一九九二年五月二二日、筑波大学）および「篆隸万象名義を通して見た図書寮本類聚名義抄の問題点」（北海道国語研究会口頭発表、一九九二年八月一五日、北海道大学）をもとにまとめたおしりものである。口頭発表の際には、多くの皆様から御教示・御意見を賜った。また、計算機用漢字字書（ydic）の利用については、豊島正之・金水敏両氏に御教示を賜った。記してお礼申し上げる。